

## 漁師列伝 No.3

## 海のプロ集団を目指せ！

全国水産業改良普及職員協議会 会長 村上 幸二



鯉の土佐節発祥の地として知られている高知県中央部の土佐市宇佐は、これまで遠洋近海鯉・マグロ漁船の乗組員を多く輩出し、沿岸でも一本釣りや曳縄漁業が盛んでした。しかし、近年、漁業者の減少とともにこれらの漁船も激減し、沿岸鯉一本釣り漁船は現在3隻となっています。そのうちの一隻を営むのが、岡本孝司社長がそれまで20年務めていた会社を辞めて、平成16年、39歳のときに設立した「(有)海洋技術」です。



**写真1：水揚げと補給のために母港市場に接岸するカツオー一本釣り漁船光丸。20代、30代の若い未経験者を雇い、プロ集団として鍛え上げながら成果を出している。**

「(有)海洋技術」は、主体である沿岸鯉一本釣りのほかに、鯉・ヨコ曳縄、ヨコワ釣り、ウルメ釣りなどの漁業、さらにホエールウォッチングや海上作業のサポート事業など幅広く行っています。所有船は9tの光丸、6tの12光丸、4.9tの11光丸、ゴムボートなどです。社員は岡本社長のほか、事務員1名と3年経過の31歳、2年半経過の

26歳、2ヵ月経過の35歳という、若くてまだ経験の浅い乗組員3名がいます。

9t光丸での沿岸鯉一本釣りのときは、社長と乗組員3人に季節雇用の1名を加えた5名体制です。鯉一本釣りの操業航海は、活餌量や積載量の関係から概ね1泊2日です。水揚地は、漁獲量や漁場、市況の情報により臨機応変に対応します。直接船から市場に水揚げする以外に、当日夕刻の市に間に合わない時などは、漁場に近い漁港に陸揚げして鯉の価格形成力が強い県内市場へ陸送します。年間収入目標は当初約4千万円でしたが、社員が増えた今は約6千万円ということです。社員の給与は陸の会社員と比べても遜色ないもので、6ヶ月分の賞与もあるとのこと。



**写真2：母港市場での水揚げ風景。漁模様や漁場、市況によっては、他港から陸送し、考え得る最も有利な方法で漁獲物を販売する。**

岡本社長は「自分たちは魚を獲るだけではなく、海の上のことなら何でもできるという海のプロ集団になる」と、社員の教育・育成に努めています。海の上では何が起き

るか分かりません。最近でもエンジントラブルや網を巻いたりして航行不能になったそうですが、その都度、安全の確保や対処の方法を教えています。またパニックになるとできることもできなくなると、パニックの対策訓練も大切だと言われます。島の多い海域を夜間航行中に、安全を確保した上でワザと電源を落としたところ、当時舵を握っていた社員が「全部消えました！」とパニックになったそうです。



**写真3：光丸クルー（向かって右端が岡本社長）。経験の少ない若者を集めながらも、海のプロ集団を目指して日々の訓練に力を入れる。**

社長はそばに立って落ち着かせ、島影や陸の灯りなどから自分の位置、方向、そして転進位置の見つけ方などを指導したとのこと。また「船のことは隅々まで知りぬいておかななくてはならない、それが漁の時にも役に立つ」と、船のドック作業や機器類の修理・メンテナンスなどもできることは、全部自分たちでやっているそうです。さらに「沖合ブイのメンテナンスや実験機器設置の時も、自分たちは作業可能な海の状態や天候を読めるし、安全にブイに渡ることもできる。船酔いする陸上の作業員よりも、迅速に作業ができる。これらのことには、船や付帯機器類の普段からの修理や

メンテナンス、日ごろから海に出ていること、全てが役立っている」と言われます。



**写真4：ドック中の光丸。必要以上に外注せず、できる限り乗組員で整備することによって、常に船の状態を把握するように努める。**

今の時代にあって、この岡本社長の「海の上のプロ集団」という理念を持ったビジネスモデルは、後継者育成も含めてこれからの新しい沿岸漁業経営の一つの姿を示しているように思えます。社長の計画では3年後に今の9t 光丸に14tの漁船を加えて、沿岸鰹一本釣2隻操業体制とします。このためには資金もさることながら、社員が成長して一人前に自立できることが前提条件であり、「若い者は日に日に伸びている」と確かな手ごたえを感じているとのこと。また、2隻体制になれば水揚量が倍増し新しい販売方法も必要となりますが、社長は会社員時代に役員も経験して新規事業開拓などで売上5倍化などの実績があり、「先頭に立つ人間はそれが向かい風か追い風か、一番よく分かる」と、展望があることを窺わせています。岡本社長は父親から引き継いだ漁師のDNAと、会社員時代に磨きあげた経営センスをもって、中学時代からの夢であった漁業経営を実現し、発展させていこうとしています。

